Osaka University Knowledge Archive

Title	学校改革と教師文化に関するエスノグラフィー
Author(s)	原田, 琢也
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42230
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【13】

氏　　名	原　田　琢　也（はら だ たく や）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学 位 記 番 号	第　16397　号
学位授与年月日	平成13年3月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学 位 論 文 名	**学校改革と教師文化に関するエスノグラフィー**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授　池田　寛 （副査） 教 授　秦　政春　助教授　小野田正利

論 文 内 容 の 要 旨

この20年ほどの間、学校は常に社会の批判にさらされてきた。校内暴力、いじめ、不登校、そして学級崩壊。新聞に学校に関する記事が載らない日などないといっても過言ではない。そういう状況の中、文部省主導の上からの教育改革が進められている。矢継ぎ早に新しい教育政策が生み出され、それらが学校現場に次々に降ろされてくる。

しかし果たして、これらの改革はうまくいっているといえるだろうか。私は中学校の教師でもあり、これらの政策の移り変わりを身をもって体験してきたのだが、残念ながらこの問いに対しては、否定的な答えを出さざるをえない。なぜなら、学校を改革するための政策のほとんどが、学校に導入されたとたんに、教師によってねじ曲げられ、無化されていくのを目の当たりにしてきたからである。それは決して、教師の資質や能力の問題だけに帰せられるものではあるまい。もし教育政策の多くが学校の現実から遊離した現状認識をもとにつくり出されているとしたら、それらは学校を変えるどころか、逆に教師の実践の制約となり、教師の実践を通して、所与の学校文化を再生産させるように機能していくことになるはずである。学校の改革を促進させるために今求められるのは、学校の改革を阻む学校文化の特質を描き出し、「改革への意図」が学校文化のプリズムを通して変容を余儀なくされながらも、どのように学校の変化に結びついていくのか、その過程を明らかにすることであると思われる。

本研究では、教師の実践をストラテジーとして位置づけることにより、学校の現実を読み解き、学校改革の可能性を探ろうとする。従来の教師の教育行為研究では、ウッズ（Woods, P.）の「サバイバル・ストラテジー」（survival strategy）に代表されるように、「ストラテジー」は、教師が目の前の困難な状況を回避し、なんとか教育行為を遂行するために用いる戦略として位置づけられ、学校改革という観点からは、負の意味合いが強い概念であったといえる。しかし、著者は、ストラテジーは、ただ教師の実践感覚（habitus）に基づく慣習的行為（pratique）として所与の学校文化ないしは教師文化を再生産するように機能するだけではなく、眼前に立ちはだかる制約によって形を歪められながらも、「変革への意図」にできる限り寄り沿う形で生み出され、結果的に、長い時間をかけながら徐々に学校に変化をもたらすものであると位置づけたい。学校を再生産するのもストラテジーであり、学校に変化をもたらすのもまたストラテジーなのである。

本研究においては、筆者が10年以上にわたって勤務してきたA中学校の教師文化とその変化を、エスノグラフィーの手法を用いて描き出す。A中学校の変化の過程を振り返ることにより、変革志向的なストラテジーを生み出すための客観的な条件が見えてくるはずである。

第Ⅰ章では、教育改革や教師の実践に関する諸研究のレビューを行い、本研究の目的や理論的枠組を明確に定め、研究の方法についても検討する。第Ⅱ章では、A中学校の生徒指導中心の教師文化のメカニズムを分析する。ここでは、A中学校の教師文化が持っている差別的な構造とその背後にあるジレンマが描かれることになる。第Ⅲ章では、A中学校に見られた具体的な変化の徴候として、地区生徒のアイデンティティ形成の実践を紹介する。そして第Ⅳ章では、同じくA中学校に見られた具体的な変化の徴候として、ティーム・ティーチングによる授業改革の実践を紹介する。変化の徴候の背後にあるダイナミズムが描かれることにより、学校改革を支援するための具体的なビジョンが模索できるはずである。そして、終章では、それまでの記述を整理し、学校改革を促進させるための具体的な提言を行うことにする。

論文審査の結果の要旨

さまざまな教育改革が学校現場に導入されているが、それらの改革が実を結ぶということは少ない。教師のあいだに共有されている「指導の文化」をその原因と考え、それはいかなるものか、それが変わるとしたらどのような条件のもとでかを、practioner-researcher として描いた論文である。

学校を秩序ある場としようとする教師の行為や生徒の類型化を、中学校における服装規制や頭髪規制の実態記述を通じて描いている。このような学校権力についての解釈は、再生産論では常識となっているものであるが、原田は、指導の文化には、ディシプリン権力と同時に、生徒を理解し学校への適応を支援しようとする「教師魂」の一面があると指摘する。この矛盾する二面性が現実の学校生活での生徒とのネゴシエーションにおいてどのように現れるのかについても記述している点は、これまでの研究には見られなかったものとして評価できる。

また、改革を拒み変革を排除するディシプリン権力が突き崩される可能性を、被差別地域の生徒たちのアイデンティティに焦点を当て、かれらを抑圧していた学校の権力構造に眼を向け始めた教師たちの変化と重ねながら描いている。同和教育・解放教育の実践として語られてきたこの現象を、一つの学校のエスノグラフィとして描いている点は評価してよい。

調査方法に関する未熟さがあるとはいえ、良くも悪くも、一人の実践者でありかつ調査者として、武骨に学校生活の現実を描いた論文であり、practioner-researcher による研究の先駆けとなるものである。方法や構成面等について公聴会できびしい意見が出されたが、それらの批判をできる限り受け入れ、修正を行った。

これらの結果を総合的に判断し、本審査委員会では本論文を博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。